

駿河台大学資格課程年報

*Surugadai University qualification
course annual report*

司 書 課 程
学 芸 員 課 程
司 書 教 諭 課 程

No.20
(2019)

ごあいさつ

駿河台大学資格課程 主任 寺嶋 秀美

『駿河台大学資格課程年報』第20号をお届けいたします。

1994年3月に駿河台大学文化情報学部が創設され、1995年4月に、文化情報学部資格課程（司書課程・学芸員課程）が設置されました。開設7年目の2001年に『駿河台大学資格課程年報』創刊号を刊行しました。そして、その後も継続して年報を刊行し、今年度も無事に第20号を刊行することとなりました。

司書課程においては、資料情報の組織化及び検索・提供を行う司書の育成を行っています。文字情報だけでなく、映像や音響も含めた多様な情報に対する理解や対処ができる、まさに情報の専門家の役割を果たす人材の育成をめざしています。

学芸員課程においては、博物館資料の展示・教育活動等の情報社会における意義・役割を重視したカリキュラムを設置し、資料情報のデータベース化やインターネット上での公開などの情報処理技術を身につけた新しい学芸員の育成をめざしています。

2004年4月から、司書教諭課程も開設され、司書教諭資格を取得するために必要な資格申請を行なうことができるようになりました。

2009年度には『メディア情報学部』が誕生し、駿河台大学資格課程は同学部に設置されています。資格課程は、メディア情報学部のほか、法学部・経済経営学部・現代文化学部・心理学部の学生も学ぶことができるようにされています。

2013年度からは、図書館法および博物館法の改正に伴い、それに沿った新しいカリキュラムが開始されています。

一方、メディア情報学部の教職課程廃止の方針に従い、司書教諭課程は今年度卒業の学生をもって廃止の予定です。これまで、司書教諭課程にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

また本学では、学外実習が始まった当初から教員がそれぞれの実習館を訪問し、実習生を受け入れてくださっている博物館とのコミュニケーションを図ってまいりました。これまでご理解・ご協力いただいた館園には、厚く御礼申し上げます。この年報を通して本学の資格課程カリキュラムの内容をご確認いただけましたら幸いです。

= 目 次 =

ごあいさつ	寺嶋 秀美
I. 司書課程	
駿河台大学 司書課程について	石川 賀一 ・ ・ ・ ・ 5
II. 学芸員課程	
駿河台大学 学芸員課程について	野村 正弘 ・ ・ ・ ・ 9
実習館訪問記：（「北海道博物館」訪問報告）	平井 純子 ・ ・ ・ ・ 14
《博物館実習 体験記録》	
博物館実習を終わって・レポートから	博物館実習生 ・ ・ ・ 16
III. 司書教諭課程	
駿河台大学 司書教諭課程について	水沼 友宏 ・ ・ ・ 37
資 料	
博物館実習協力館一覧（過去3年分） 2017年度、2018年度、2019年度	
2019年度資格課程（司書課程・学芸員課程・司書教諭課程）修了者	
司書課程科目担当教員一覧	
学芸員課程科目担当教員一覧	
司書教諭課程科目担当者一覧	

I . 司書課程

駿河台大学 司書課程について

メディア情報学部 講師 石川 賀一

司書課程の特色

駿河台大学では1994年文化情報学部創設の翌年に資格課程として司書課程と学芸員課程を設置し、これまで1,200名以上の資格取得者を輩出している。2001年度より資格課程は全学に開かれ、他学部の学生も履修できるようになった。さらに、2004年度からは司書教諭資格課程を設置し、50名以上が司書教諭資格を取得している。

2009年に文化情報学部はメディア情報学部に変更された。メディア情報学部は、映像・音響メディアコース、デジタルデザインコース、図書館・アーカイブズコースの3つのコースで構成されており、様々なメディアの本質を理解し、各種メディアに精通し、多元的メディア社会に即戦力となる人材の育成を目標としている。

司書が専門的な業務を遂行する職員としてたずさわる図書館には、公共図書館・学校図書館・大学図書館に加えて、企業等に設置されている専門図書館・情報センターがあり、それぞれの利用者のニーズに応じて様々な情報サービスを提供している。駿河台大学の司書課程ではメディアと情報資源に関する全般的な知識や技術を学んだ上で、司書資格を取得することにより、今後のマルチメディア時代に公共図書館だけでなく、大学・専門・学校図書館などでも役に立つ図書館・情報専門職の教育を行っていることが特色である。

司書課程4年間の流れ

司書資格のための科目は1年次から開講されている。4年次までに資格に必要な科目を計画的に修得し単位をそろえる。2013年度以降の入学生を例に、4年間の履修の流れを紹介する。(司書課程科目一覧を参照)

1年次： 入学してすぐに資格課程登録ガイダンスを受け、『資格課程受講登録』を行う。授業に出席し単位を修得する。1年次から開講される必修科目は「生涯学習概論」「児童サービス論」の2科目である。

2年次： 授業に出席し単位を修得する。2年次から開講される必修科目は「図書館情報学」「情報サービス論」「情報サービス演習Ⅰ(基礎)」「情報資料論」「情報組織化論」の5科目である。選択科目も適宜修得する。

3・4年次： 授業に出席し単位を修得する。3年次から開講される必修科目は6科目(講義科目2科目、演習科目4科目)で、必ず修得し、また選択科目を適宜修得する。そして司書資格に必要な単位(30単位)をそろえる。

司書課程科目一覧（2013年度以降入学生適用）

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1	13科目 26単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	2	
		図書館制度・経営論	2	図書館・情報センター経営論	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	図書館情報システム演習	2	3・4	
		図書館サービス概論	2	図書館サービス論	2	3・4	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス演習Ⅰ（基礎）	2	2・3	
				情報サービス演習Ⅱ（発展）	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	情報資料論	2	2	
		情報資源組織論	2	情報組織化論	2	2	
		情報資源組織演習	2	情報組織演習Ⅰ	2	3・4	
				情報組織演習Ⅱ	2	3・4	
児童サービス論	2	児童サービス論	2	1			
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	歴史資料論	2	3・4	2科目 4単位 以上
				デジタル・アーカイブス論	2	3・4	
		図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
		図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	

司書課程科目一覧 (2017年度以降入学生適用)

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	<u>生涯学習論</u>	2	<u>2</u>	13科目 26単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	<u>1</u>	
		図書館制度・経営論	2	<u>図書館制度・経営論</u>	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	<u>図書館情報技術論</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	
		図書館サービス概論	2	<u>図書館サービス概論</u>	2	<u>1</u>	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス演習Ⅰ(基礎)	2	<u>3・4</u>	
				情報サービス演習Ⅱ(発展)	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	<u>図書館情報資源概論</u>	2	<u>1</u>	
		情報資源組織論	2	<u>情報資源組織論</u>	2	2	
		情報資源組織演習	2	<u>情報資源組織演習Ⅰ</u>	2	3・4	
<u>情報資源組織演習Ⅱ</u>	2			3・4			
児童サービス論	2	児童サービス論	2	<u>2</u>			
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	歴史資料論	2	3・4	2科目 4単位 以上
				デジタル・アーカイブス論	2	3・4	
		図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
		図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	
		図書館総合演習	1	<u>図書館総合演習</u>	<u>2</u>	<u>3・4</u>	

(前カリキュラムからの変更点に下二重線を付した。)

II. 学芸員課程

駿河台大学 学芸員課程について

メディア情報学部 教授 野村 正弘

学芸員課程の目標と経過

駿河台大学の学芸員課程は、メディア情報学部設置されている。メディア情報学部の教育目標の一つは、「情報メディアエーター」の養成である。この「情報メディアエーター」とは、人間の文化的営みに関する諸々の資料などに関する専門的知識を持つとともに、これらの資料情報をシステム化し、データベース化するための情報処理技術を身につけ、これらの資料に関する要求に対して適切な情報提供の仲介を行う専門家のことである。文化資料の宝庫とも言える博物館の「情報メディアエーター」とは、その能力をもつ博物館学芸員を意味する。

この目標を達成するため、メディア情報学部の前進である文化情報学部のカリキュラムには、学部設置当初から博物館関係の科目が設けられた。1995年、博物館法施行規則にもとづく学芸員資格取得のための必要科目も開設された。また同年、学芸員課程と司書課程を合わせた「文化情報学部資格課程」が設置され、専門的知識と情報処理技術を身に付けた学芸員の養成が本格的に開始された。

その後、1996年の博物館法施行規則改正に伴い、1997年度から必修科目が開講されている。2001年度には、他学部の学生や学外の科目等履修生も学芸員の資格取得を目指せるように、学則および科目の一部を改正した。資格課程も学部規模から大学規模に拡大され、現在は全学部からの委員で構成される「資格課程委員会」がその運営に当たっている。

学芸員課程の履修科目

1995年の開講時には、必修科目として6科目14単位、選択科目では12科目の中から4科目8単位以上、人文・自然科学系科目として10科目の中から3科目6単位以上の履修が資格取得に必要なように設定された。

1996年度の博物館法施行規則の改正にともなって、必修科目に「生涯学習概論」、「博物館概論」を追加し、必要単位数を8科目18単位とした。さらに、2001年度から、文化情報学部のカリキュラムの一部改正、ならびに資格課程を本学の他学部、科目等履修生に開講したことにもない、一部科目の新設ならびに入れ替えを行って、学芸員資格取得に必要な科目を加え改正した。

主な変更点は、次の通りである。必修科目では「博物館資料論」を設け、選択科目では科目を一部入れ替えるとともに、他学部開放にもない人文・自然科学系科目をA、Bの二つに分け、それぞれⅡ群、Ⅲ群とした。履修方法は、Ⅰ群は、受講者全員が履修することとし、Ⅱ群、Ⅲ群の科目からは2科目4単位以上を自由選択により修得しなければならないことにした。また、「博物館実習」は、年間を通して大学で行う学内実習と博物館などの現場施設で行う学外実習を合せて実施している。

2013年度からは博物館法施行規則改正に伴う新科目の開設を行い、別表1のカリキュラムでの学芸員養成を行っている。2017年度からは、配当年次、選択科目の見直し等を行い、資格を取得しやすくして、別表2のカリキュラムでの学芸員養成を開始している。

履修登録および博物館実習への対応

学芸員課程の履修については、毎年、「資格課程履修ガイド」を発行し、学生に配布して周知を図っている。これに基づく年間スケジュールでは、まず、毎年4月、1年次生および3年次編入生を迎えた段階で、司書課程と合同で「資格課程登録ガイダンス」を行い、その後、学芸員課程の履修を希望する学生は、登録期間内に本学の所定の方法にしたがって教務課窓口で登録することになっている。

博物館実習については、3年次生を対象に、毎年11月中旬に第1回のガイダンスを行い、博物館実習の実施内容や実施上の注意事項を改めて説明している。そのとき、実習館園に関するアンケート調査を行い、その後のガイダンスで担当教員と学生が相談しつつ実習希望館園を絞り、適時学生自身に申し込みをさせている。その後も、申し込みの状況や途中経過などを確かめ、およそ3月～4月末までに学生各自の実習館の内諾をいただけるようにしている。内諾をいただいた実習予定館園に、正式に文書で依頼している。

実習直前には、実習予定学生に対して「実習直前ガイダンス」を行っている。ここでは、博物館実習は、実習実施に当たっての諸注意や期間中の連絡体制等を説明し、実習日誌などを配布して、実習の心構えと準備を整えさせている。博物館実習の授業内では、実習に対する心構え、事前準備などの事前指導を行っている。実習が始まると、担当教員ができるだけ実習期間中に各実習館園に挨拶に伺って、実習状況の確認と実習学生の激励を行い、以後の学生受入についてお願いしている。また、実習終了後には事後指導を行い、学芸員の職務を再確認させ、学芸員になるための一層の努力を促している。なお、資格課程に関わる一連の事務は、メディア情報学部担当の教務課職員がその処理に当たっている。

学芸員資格課程の今後

1997年度に初めて、本学の学芸員資格課程で86名が学芸員の資格を取得したが、2013年度の法改正後は5～6名の学生が資格を取得している。ここ数年は10名程度と微増傾向にあるが、これまで博物館に就職した者は数名にすぎない。学芸員募集には、募集分野の細分化や高学歴化の傾向、施設運営の指定管理制度導入の影響が見られ、資格を持ちながらそれを活かす職に就けない状況が続いている。これは本学資格課程だけの問題ではなく、学芸員課程を開設している日本全国の大学に共通な問題である。

一方、学芸員資格は国家資格であるため、これを取得したことを重視して採用を行ってくれる企業も、多くはないものの存在する。そこで本学では、博物館実習を一種のインターンシップの場としても捉えている。幸い、実習博物館でも、実習学生の受け入れを社会教育施設の業務の一つであると解して協力してくれるところもあり、今後大学と博物館とのさらなる連携を推進して行く必要がある。

別表1 学芸員課程科目一覧（2013年度以降入学生適用）

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	1	10科目 22単位 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	2	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	3 4	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	3 4	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2 3 4	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2 3 4	
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報学 マルチメディア論	2 2	3 4 2	
博物館実習	3	博物館実習	4	4		
選択科目	I群	資料・情報管理系科目	アーカイブズ学	2	3 4	2科目 4単位 以上 選択
			映像メディア論	2	3 4	
			音響メディア論	2	3 4	
			データベース設計論	2	3 4	
			ネットワーク構築論	2	3 4	
			デジタル・アーカイブズ論	2	3 4	
	II群	人文・自然科学系科目	歴史資料論	2	3 4	4単位 以上 選択
			都市と文化施設	2	2	
			文化人類学Ⅰ	2	1 2	
			文化人類学Ⅱ	2	1 2	
			歴史学Ⅰ	2	1 2	
			歴史学Ⅱ	2	1 2	
			環境生物学Ⅰ	2	1 2	
			環境生物学Ⅱ	2	1 2	
			生命の科学Ⅰ	2	1 2	
			生命の科学Ⅱ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅰ	2	1 2	
			現代自然科学Ⅱ	2	1 2	
			地球科学	2	1 2	
			法史学Ⅰ	2	2 3	
経済史Ⅰ	2	1				
経済史Ⅱ	2	1				
日本文化論Ⅰ	2	2				
メディア社会学	2	2 3				

別表2 学芸員課程科目一覧（2017年度以降入学生適用）

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	<u>生涯学習論</u>	<u>2</u>	<u>2</u>	10科目 <u>20単位</u> 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	<u>1</u>	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	<u>2</u>	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	<u>2</u>	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2	
	博物館情報・メディア論	2	<u>博物館情報・メディア論</u>	2	3 4	
博物館実習	3	<u>博物館実習Ⅰ</u>	<u>2</u>	4		
		<u>博物館実習Ⅱ</u>	<u>2</u>	4		
選択科目	資料・情報管理系科目	<u>マルチメディア論</u>	2	2		
		アーカイブズ学		3 4		
		映像メディア論	2	3 4		
		音響メディア論	2	<u>2</u>		
		データベース設計論	2	3 4		
		ネットワーク構築論	2	3 4		
		デジタル・アーカイブズ論	2	3 4		
	人文・自然科学系科目	歴史資料論	2	3 4		
		都市と文化施設	2	2		
		文化人類学Ⅰ	2	1 2		
		文化人類学Ⅱ	2	1 2		
		歴史学Ⅰ	2	1 2		
		歴史学Ⅱ	2	1 2		
		環境生物学Ⅰ	2	1 2		
		環境生物学Ⅱ	2	1 2		
		生命の科学Ⅰ	2	1 2		
		生命の科学Ⅱ	2	1 2		
		現代自然科学Ⅰ	2	1 2		
		現代自然科学Ⅱ	2	1 2		
		地球科学	2	1 2		
		<u>法史学</u>	2	2 3		
		経済史Ⅰ	2	1		
		経済史Ⅱ	2	1		
		日本文化論Ⅰ	2	2		
		<u>日本文化論Ⅱ</u>	<u>2</u>	<u>2</u>		
		<u>西洋文化史</u>	<u>2</u>	<u>2 3</u>		

(前カリキュラムからの変更点に下二重線を付した。)

《博物館訪問記》

北海道博物館を訪問して

現代文化学部 教授 平井純子

「北海道なんですけど、来ていただけますか？」

私のゼミの学生、五十嵐早紀さんが訪ねてきた。彼女は北海道出身、地元北海道での博物館実習を希望していた。私は二つ返事で了解した。北海道博物館での実習が本人にとって必ずや有意義なものになるであろうと思ったこと、そして、私の前職は北海道の知床にある財団の職員であり、北海道には強い思い入れがあったからだ。

札幌市郊外、野幌森林公園内にある北海道博物館は、北海道の自然や歴史、文化を紹介する北海道立の総合博物館である。北海道が有する豊かな自然環境と人とかかわりや、アイヌ文化、本州から渡来した移住民の暮らしなどを調査・研究している。また、北海道の各方面の資料を収集・保存し、展示や教育、イベントのほか、各種事業を積極的に行っている。学芸員は、動物学や植物学など自然史系スタッフもあり、調査研究活動および社会教育活動を担う地域の博物館として、人文系と自然史系ともにバランスよく実践されている。

2019年8月20日、五十嵐さんの実習初日に北海道博物館に伺った。同日程で博物館実習を行う学生たちは20名ほどおり、その出身大学は地元北海道大学はもちろん、全国から実習に来ており、南は琉球大学からの学生もいるとのことだった。外国籍の学生もみられ、普通の大学の学びでは体験できない環境の中での実習であるとともに、北海道博物館での博物館実習が充実したものであることの証でもある、と感じた。

訪問日は初日ということもあり、北海道博物館の収蔵庫の見学と、隣接する施設の一つ、北海道開拓の村を見学するということであつた。北海道開拓の村は、北海道開拓時代の建物を移築・復元した野外博物館で、札幌停車場や北海道大学の恵迪寮、有島武郎邸など見どころの多い、観光客にも人気の施設である。

今後はグループごとにディスカッションを交えつつ、博物館での実習に取り組んでいく、と、担当の大谷氏から説明があつた。「みんな苦勞しますが、頑張ってくれると思いますよ」とのお言葉をいただき、感謝とお礼をして博物館を後にした。

さて、その後五十嵐さんはどうだったのだろうか？実習の終了報告は以下の通りでした。

「色々な学生・院生・学芸員さんと交流でき、自分の知識の少なさや、自分が集団行動を行う中で、なにが苦手ななにが得意か、理解できた気がします。とても良い経験になりましたし、すごく楽しむことができました。」

今後の五十嵐さんの活躍に期待したいと思います。

五十嵐さんの実習にあたり、ご指導いただきました野村先生をはじめとする資格課程ご担当の諸先生方、事務職員の平澤さんには深く感謝いたします。ありがとうございました。



写真1 北海道博物館のシンボルの
マンモスの骨格標本



写真2 北海道博物館で実習をしている
五十嵐早紀さん

《総合博物館での実習》

入間市博物館 ALIT

メディア情報学部メディア情報学科 4年 石井瑞穂

私は7月20日から8月4日までの14日間、入間市博物館で博物館実習をさせていただきました。入間市博物館はお茶、地域の自然・民俗・歴史、科学など、様々なテーマを持つ総合博物館です。入間市博物館には常設・特別展示室の他に「青丘庵」という茶室やお茶を使った料理を取り扱うレストラン「一煎」、体験学習室など様々な施設があり、それらの空間を活かした事業を数多く行っています。入間市博物館にはALITという愛称があり、それぞれArt・Archives(美術・保存)、Library(図書館)、Information(情報)、Tea(お茶)の頭文字を組み合わせたものです。

実習では主に家庭用ゲーム機を使った展示ガイド作成、各担当職員の方々の仕事紹介、展示解説発表、イベントの準備・運営補助、収蔵庫等の清掃を行いました。

展示ガイド作成では、実習生7人で協力して家庭用ゲーム機を使った展示ガイドを作成しました。作成ソフトでは音声と画像を組み合わせて編集できますが、ゲーム機の画面が小さいことから細かい文字・画像を映しても伝わらない等、家庭用ゲーム機の特徴を考慮したうえで利用者にとって分かりやすい展示ガイド作成を目指し調整を重ねました。また、この展示ガイドは実習後半の8月1日から実際に配信するという納期が設定されていたことで、作業が難航して期日までに完成しないのではないかという問題もありましたが、なんとか前日までにガイドが完成し、予定通り配信することができました。全員違う大学に通う実習生7人で短期間のうちに話し合っ展示ガイドを作るという経験をしたことが無かったためか、話し合いや意見をまとめるのに予想外に時間がかかってしまい、この活動はグループで時間内に終わるよう計画的に作業を進めるという課題でもあったのだと感じました。

各担当職員の方々の仕事紹介では、学芸担当・文化財担当・指定管理者・展示解説員と、博物館で働く職員の方々から自身の仕事内容について教えていただきました。同じ学芸担当でも、個人によって仕事内容が異なることや学芸員以外の方々がどのような役割で働いているのか、展示解説の方が解説で工夫している点、入間市博物館において指定管理者制度がどのように取り入れられているのかなど、職員の方から直接話を聞くことで学べたことは非常に大きく、学芸員を目指して学習するうえで貴重な経験になりました。

展示解説発表は、実習生が入間市博物館の常設展示を見たうえで自分のテーマを考え、そのテーマのコーナーを使っての展示解説内容を考え、展示解説発表会で実際に発表するという活動でした。発表にあたって想定対象者も考える必要があるほか、発表時間は5分というルールの中で、展示についての知識をどのように見つけるのか、発表する時にどのような工夫をするか、どう解説すれば展示を活かすことができるのか、想定対象者に分かりやすく伝えるように話

すにはどうすれば良いのかなど、個人で考えることが多い活動でした。また、前述したように家庭用ゲーム機を使った展示ガイド作成に時間がかかり、配信後も画像の修正をしたため展示解説発表について考える時間が少なくなっていました。短い時間の中で考えた展示解説発表会でしたが、実習生それぞれが話し方やスマートフォンで音声を流す等の工夫を行っており、それぞれの個性が反映された発表のように感じました。私はクイズを取り入れた解説をしましたが、緊張してしまい自然に話せなかったことが課題になりました。各発表が終わった後は実習生と展示解説員、学芸員、指導主事の方からそれぞれ講評があり、発表の反省ができました。



写真3 展示解説発表の様子

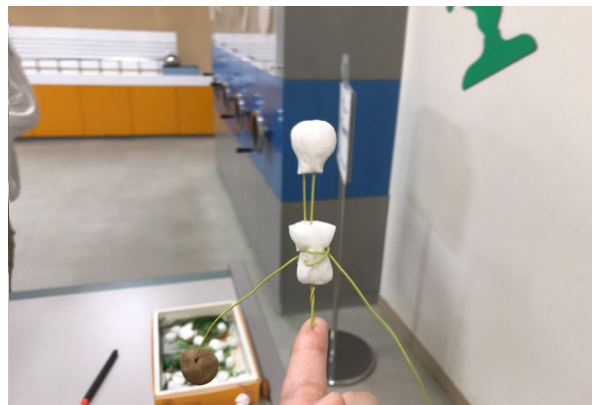


写真4 作成したやじろべえ

イベントの準備・運営補助については、主にサイエンスバー、平和展、こどもお茶大学、遊びの広場、茶席準備でそれぞれ行いました。平和展では展示シートを壁に貼る作業をしましたが、複数のシートで1つの展示コーナーを作るため、シートの上辺を揃えて貼り付けましたがシートが斜めになってしまい、展示を垂直に、均等に貼る作業が難しいということを実体験で知ることができました。サイエンスバーでは、こども科学室でやじろべえ作りの手伝いをしたが、子どもにやじろべえが立つ原理を科学的に説明することが中々できず、講師の方のように分かりやすい解説をすることも学芸員に求められる能力の一つだと感じました。

清掃は、旧黒須銀行・旧石川組製糸西洋館の資料整理と各収蔵庫の掃除を主に行いました。また、収蔵庫では温湿度の定期検査を実習生で行い、湿度が高い場合は除湿する等の対応についても勉強することができました。

その他にも、桑こき機のスケッチや展示ガイドのポスター制作、お茶の点て方など多くの経験をさせていただいたことで、本当に多くの気づきを得られた実習でした。特に、職員の方々の仕事紹介と展示解説発表については、「学芸員の実習なのだから、イベントの手伝いばかりになってもいけない」と今年度からの新しい試みとして始めたものであり、実習生がより深く学べるような配慮をしていただいたとのことでした。この実習で学んだことは、大学の授業だけでは得られない貴重なものばかりでした。実習を受け入れてくださった入間市博物館の方々に感謝するとともに、この実習経験を今後の学芸員の学習に活かしていきます。

私は7月27日から8月8日までの休日を除いた9日間、埼玉県立川の博物館で実習をさせて頂いた。川の博物館は、荒川の調査研究の過程で収集された資料を広く公開する為に、1997年8月1日に開館した館である。

主に学ばせて頂いた内容は、イベントの企画運営、教育支援活動の疑似体験、学芸員の方の調査研究の疑似体験、資料の取り扱い実習、そして専門的な知識の伝承訓練である。

イベントの企画では水を使用した実験を行い協調性が大切である事を学んだ。実習生1人ずつ考案する事から始まり、企画から運営まで実習生全員で行うという大変貴重な経験をさせて頂いた。似たような事は授業やアルバイト等で経験していたが、仕事として行う機会は大変稀であるため、限られた条件の中でよいものを作らなくてはならないという責任をより実感した。

教育支援活動疑似体験は荒川へ行き、学校向けに開催される体験教室を実際に体験して現場には書籍やインターネットでは伝わりきれない情報が豊富である事を学んだ。例えば河原から同じ種類の石だけを集め、酷似した石同士の見分け方や石の用途を学んだり、川の中から生物を採取して観察したりする事を行った。疑問や身近なものを教材に変えるために試行錯誤するところが仕事の遣り甲斐であり、自身の学びにもつながるのではないかと考えた。

楽しく学んで頂くために時には意外な対応をする場合もあると伺った。例えば虫などの生き物や水に抵抗がある方には無理に強制しないということである。強制で得られるものは何もない。今後接待の機会があった際はアプローチの工夫を心掛けたいと思った。

学芸員の方が行う現地調査の疑似体験では、教材になるものは実は身近な場所にもある事を学んだ。現地調査疑似体験は、学芸員の普段の仕事をお客様向けにも様々な内容で行われている。今回は川の博物館周辺の観察を行ったが、道は急な傾斜が多かった。実は理由があり、河岸段丘と呼ばれる、川の浸食によって階段状の地形になったということを知った。参加されるお客様の中にはその理由を疑う方もいるが、証拠として、川から離れた場所に川沿いにこしかない石が落ちている場所へ案内するという事も伺った。また、「学芸員と一緒になければ普段は絶対来ない場所だ」と言われた事もあるという。この様に住宅街等一見ごく普通に見える場所でも調査によって歴史が浮かび上がり、時には新しい発見もある。それをどの様に活用するか、どの様にすればお客様に楽しんで頂けるかを考える事も学芸員に求められるスキルである事を教わった。分かり難いことを誰にでも分かるように伝えるという形で幅広く生かしていきたい。

資料取り扱い実習では展示実習と資料保存実習を行い、双方を通し、仕事をする上では短時間の中で効率良く且つ正確に行う事が重視される事を学んだ。展示実習では収蔵庫の中の資料を選抜して展示レイアウトを作成するという課題を頂いた。他の実習生の方々と協力して資料の寸法を測ったが、縦横比だけでなく奥行きも測定したり、衣服や蓋付きの資料など構図が複雑な資料はその分計測する部分も細かく分けたりする必要があった。資料配置を決める時も、同じ資料でもどこに何を配置するかで印象や展示できる資料の個数が大きく変わることに関心をもたされた。良い方向へ進める為に少しでも気を使う事を心掛けたい。

資料保存実習では資料の欠陥部を調べる調書と資料を安全に包装する梱包を行った。私は失敗を回避する為に念入りに作業する事を心掛けたが、その行為が仇となり作業が遅れてしまった。担当の方からは「雑に扱う事は駄目だが、過敏に扱ってもかえって悪い結果を招く場合がある」、「短時間でいかに効率よく効果的に出来るかがポイント」と指導を頂いた。どの様な職業に就いても時間厳守や効率性は必ず求められる。現場の状況に合わせて時間をかけるべき部分



写真5 掲示物の作成

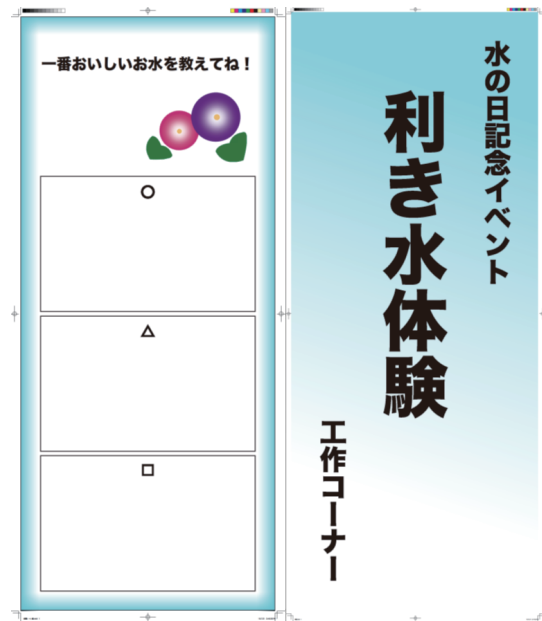


写真6 完成した掲示物

と手早く行う部分を把握する事、ものを大切に扱う責任、そして大切なものを差し出して頂いた人への感謝の気持ちを忘れぬようにしたい。

専門的な知識の伝承訓練ではアゲブネという過去に水害救助に使用された舟の乗船体験の運営を行い、活動を通して情報を伝える以上に他者から情報を伺う事も重要である事を学んだ。事前準備でアゲブネ本体や水害が多い地域の特徴等、初めて知る情報を正確に伝えるために記録を取り、イメージトレーニングも行ったが、担当の方から「内容を100%伝えるよりもお客様の反応を見て話す内容を選ぶ方が大切」と助言を頂いた。そこで、まずは挨拶から始め、次に船についてクイズの様な形で聞いてみて、様子を見ながら説明をするという形で行ってみた。アゲブネについて初めて知った方もいれば見たことがある方もいて反応は様々だった。又、あるお客様は自身のお住まいが過去に水害に遭った時、浸水位という浸水した値を示すための印が電柱についていると話して下さった。ただ単に意見がバラバラなのではなく、世代や出身地によって経験した時代背景や生活環境も異なる事が背景にあるのだろう。教えることが学芸員の仕事だと思っていたが、教えてもらう事も大切な仕事であり、そこから新たな発見が生まれる事もあるのかもしれない。周囲に関心を抱いて新たに得た情報を整理して分かりやすく伝える事が出来る人物になりたいと思った。

実習を振り返り、学芸員の仕事は人と協力して行う作業が多いことを知った。その為に時にはシンプルに行動することが必要であり、そして通常ではわからない専門的な知識が求められる事を考えさせられた。

最後になるが、ご多忙の中暖かく迎えて下さり、学芸員の仕事の遣り甲斐や厳しさを丁寧に教えて下さった川の博物館の方々に改めて感謝の言葉を贈りたい。

私は、8月20日から8月30日までの休館日を除いた10日間、北海道博物館で博物館実習をさせて頂きました。北海道博物館は、北海道ならではの自然・歴史・文化を広く扱う総合博物館です。道立自然公園野幌森林公園内に位置し、公園内の一部が記念施設地区となっています。地区内には北海道博物館のほか、北海道百年記念塔や野外博物館である北海道開拓の村・自然ふれあい交流館などの施設があります。館内の学芸員は30名ほどで、五つの研究グループに分かれて調査研究を行っています。

主な実習の流れとして、1日目にガイダンスがあり、2日目から6日目は各分野の研究グループである学芸員の方々が一日ずつ実習を担当していただき、7日目から10日目は展示制作を行いました。

実習初日には、博物館実習のガイダンスと実習生の自己紹介と館長による講義があり、館内設備の案内と「北海道開拓の村」の案内がありました。館内設備の案内では、普段見られないバックヤードを見学させて頂きました。搬入口から始まり、資料処理室・資料受入処理室に入り、何をやる部屋かどのような器具を使っているのか設備はどうなっているのかなどの説明を受け、北海道では珍しくエアコンがあつて冬場でも冷房いれたりするといった小話を聞きました。それから、第1収蔵庫を除いた、第2・3収蔵庫と第4・5収蔵庫の中に入れてもらいました。収蔵された資料はその特徴に合わせて、「年代」「関連する業種」「受入元の場所」ごとにまとめ、並べられていました。

「北海道開拓の村」は、北海道の開拓の歴史をものがたる建造物を野外展示している博物館です。広い敷地の中から何件かピックアップして案内してもらい、野外博物館としての特徴や難しさ、教育普及について説明してもらいました。

2日目には、博物館研究グループによる資料のクリーニングを行い、館内図書室での書庫整理・POP作り、収蔵資料データベースの説明がありました。資料のクリーニングは受入準備をしている北海道で収集した農具を使い、外で赤錆とりを行いました。紙やすりと刷毛を使い粗削りをして、仕上げに薬品が入った霧吹きをかけ布巾で全体を拭きました。資料はよく見てみるとそれぞれ違いがあり、休憩時間に周りの実習生と見せ合い観察しました。何がどう違うのか、読める印などを探し、詳しい学芸員さんに話を聞きました。最初触っただけ掃除をただけときっかけは些細ですが、農具の知識があるわけではなくとも色々な情報が見えました。最後に片付けをして午後から館内図書室で第1書庫・第2書庫に入り取りやすく並べる作業を始めました。書庫内の図書は、とくにアイヌなど北海道に関わる本が多く見かけました。また他博物館の企画展図録や刊行した書物が書庫の半分を占めていたのが印象的でした。その後、博物館が刊行した書物を書庫から一つ選び、図書室において紹介するPOPを作ることになりました。図書室は常設展の下にあるため、来館者が常設展を見た後に何に興味をもつだろうかどうしたら手に取ってくれるか考えて作成しました。

3日目には、歴史研究グループによる文書資料の整理と考古資料の注記を行いました。文書資料の整理は南條家から譲られた受入資料をひとつずつ観察して、中性紙の封筒に情報を書き出し、資料を封筒に収めました。この実習では要領がつかめずひとつの資料に時間をかけすぎてしまったのが反省点です。考古資料の注記では机一面にある土器片の資料に、面相筆と水溶性の白インクを使い資料番号を書きました。細かく読める字で書く、というのは最初筆に慣れないうちは苦戦しましたが、コツを教えて頂き、やっていくに従ってできるようになりました。他の実習生が書き間違えて洗い流すことになったり、資料を折ってしまったりとハプニングがあり、資料に触れる際には大切に扱わなければ、とより慎重になりました。

4日目には、生活文化研究グループによる受入資料の整理・注記を行いました。旧北海道拓殖銀行の野球部の資料を、収蔵庫の前室で広げ注記して収蔵庫に戻しました。3日目とは違いトロフィーや盾などの金属製、旗・ユニフォームな

どの布製品、様々な材質・大きさの資料に、番号がわかりやすく博物館資料として意味を損なわない部分に注記することになりました。大きい資料は置き方を気をつけたり、脆い部分がある資料は持ち方を変えたり、インクが塗れない資料にはタグをつけたり、など資料に合わせて作業を進めました。

5日目には、自然研究グループによる自然観察会の企画・実施を行いました。午前には学芸員さんの案内のもとで公園内の遊歩道を歩きテーマを考え、午後には班に分かれて準備をし、実習生同士での自然観察会を発表しました。

6日目には、アイヌ文化研究グループによるアイヌ関連資料の仮整理カードを記入し、講演会の聴講、グループワークを行いました。海外のアイヌ語学者の研究資料をどうい資料なのか仮整理カードにまとめることになりました。筆記体の文字がなかなか読めず、ネットで検索しつつ所要所で和訳し欄を埋めていきました。

7日目から最終日までには、展示ケース1つと壁パネル2つの総合展示にある廊下の一角に置く小さな展示コーナーを作ることになりました。テーマ決めや何を作るかの会議は順調に進んでいたのですが、最終日になって手直しに時間がかかり締め切り内で終わらなくなりました。学芸員さんの時間をかりて何とか展示になりましたが、できあがって全体をみると展示パネルと資料がちぐはぐになってしまい反省すべきところが見つかりました。次をどうしようかと今後をよくする課題が明らかになりました。いつもは展示ケースから眺め解説パネルを見るだけだった展示資料が、様々な博物館資料を実際に触れるという貴重な経験で、実習後に博物館来館した際には展示資料の見方が大きく変わりました。総合博物館ともあって集まった実習生は大学・学部は様々で、それぞれ学生の興味関心や専門知識が異なり、グループワークをする中で全員の積極的な意見がとても良い刺激になり吸収できたと思います。

10日間の実習は、より多くのことを学べ、これからの活かせる貴重な経験となりました。実習を受け入れてくださった北海道博物館の方々には、お忙しい中でもわかりやすく丁寧に教えて頂き、博物館という場で大切な資料に触れ、展示作りを挑戦させて頂く機会を下さりありがとうございました。



写真7 考古資料の注記の様子



写真8 実習で製作した展示コーナー

《歴史博物館での実習》

石垣市立八重山博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 浦崎未来

私は8月13日から25日まで日曜日と月曜日を除く約2週間、石垣市立八重山博物館で実習をさせて頂いた。実習では授業で習った時よりも博物館の教育活動の役割や地域との関わりの方が身をもって感じた。

この博物館は、八重山の歴史民俗考古を主に扱っており、資料も地元根付いたものが数多く展示されていた。この館で実習を行ったのは私を除く4名で1名は諸事情により一週間早く終了した。今回の実習では、夏休みに行われる「こども手作り教室」がメインになり、その準備を主に行った。

始めの一週目は、8月17日に行われる「アダン葉おもちゃ、ソテツ葉虫かご作り」の準備を行い、二週目は24日に行われる「手すき和紙のハガキ作り」の準備、この館で実施していた子供博物館の昆虫標本の防虫剤の取り換え、博物館資料の移動を行った。まず、「こども手作り教室」で使用するアダンの葉やソテツの葉、手すき和紙のカジノキ、原材料は全て島内から取ることが出来、実際に採集を行った。私は上記のものを一度も作ったことがなかった為、原材料から採集することに驚いた。採集する場所も市街地のものではなく、市街地から離れた山奥だった。実際に採集を行い、八重山の伝統的なおもちゃは自然の中から作ることが出来、先人たちは暮らしの中から編み出すことに力を持っていたと感じた。そして、八重山の地理と歴史を知っていないといけないということを改めて実感した。それは、私を除く3名は沖縄本島の大学に進学しており、専攻は民族学と考古学だったからだ。今回の実習は準備が主だったが、学芸員の方とは島の歴史や地理などを話すことがほとんどだった。八重山の歴史を学ぶ機会があったが、自ら知る機会が少なかった為、話についていけないところがあり地域の歴史を知る大切さを学び、また、夏休み期間だったこともあり地元の小学生が八重山の歴史を調べに来ていた。考古学を専攻している実習生が小学生に対し、説明していた。事前に博物館の展示資料はある程度調べたつもりだったが、知識不足だった。実際にこども手作り教室を行って事前に作りかたを学び、教えるのは簡単だと思っていたが、低学年の小学生が多くアダンの葉を使った「馬」作りは丁寧に作っていたが、「ハブ」作りは集中力が切れていた。私が教えた席の子供は3人おり、親御さんが2人、という席だった。ハブ作りは殆ど親が作っており、力が弱い小学生ではしっかりとしたハブは難しいようだった。午後から行ったソテツの葉を使った虫かご作りは形を整えることが難しく、棘もあるため心配だったが子供たちは痛いと言っているにもかかわらずすぐに作業を続けていた。途中で集中力が切れて怒られている小学生もいたが、完成させようとしている学生が殆どで頑張っていた。なるべく子供自身が作り、それをサポートする形で見守っていた。それでも、一生懸命学んで作ろうとしている学生もおりワンツーマンで教えた。教えることは難しいが、丁寧に教えることで子供や親はしっかりと聞いてくれることが分かった。博物館は教育機関の役割もある為、こういった教室や物作りも出来なければならない事が授業で習っている時よりも強く感じた。

博物館の資料を整理する作業を博物館の外で行った。市民会館という場所で、博物館の資料を保管する場所が取れず、博物館の外に預けているということだ。整理したものは木の板で作られた「カイ」と呼ばれるものだ。はじめからそうだったのかは分からないが、木の板が剥がれているものや取っ手の部分が錆びており、今にも折れそうなものはいくつかあった。数年前に寄贈されたものだというが、このまま保管していくのはどうなのだろうか強く感じた。博物館は1972年、沖縄が日本に復帰した年に建てられたものだ。資料を保存する場所が無くなってきている。場所が小さいということが博物館にとって問題になっていた。

今回の実習では、地域の歴史を住んでいたころより強く感じた。進学して島から離れたこともあり、客観的に島の状況を以前より理解できた。実習で、「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島」と書かれた感謝状を見せていただいた。中国と台湾が領有権を主張している尖閣諸島の問題に関する貴重な資料だ。その資料は、尖閣諸島の問題があって改めて調査してところ見つかった物だという。調査にも協力して下さった地域の方たちもおり、博物館が地域との関わりがいかに大切かを感じた。そして、博物館が地域の資料を収集していく上で保存していく場所が限られつつある。資料を寄贈しても博物館がその役割を果たせなくなってしまう。地域の歴史民俗考古主に扱っている博物館なら地域との信頼は非常に大切であり、博物館があることによって地域の歴史を学ぶ機会や文化を感じる機会が増えると思う。実際に実習をさせていただいて私も強く感じたからだ。この実習で八重山博物館の地域での役割や地域との関わりの大切さ、教育活動をしていくための知識や体力、その他の子供たちとの関わり方や一般常識、学芸員はあらゆることをこなさないといけないと学んだ。



写真9 ソテツの虫かご子ども教室



写真10 標本取り扱い

流山市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 藤田悠太郎

私は2019年8月21日から8月29日までの24日、25日、26日を除く6日間、流山市立博物館で博物館実習をさせて頂きました。流山市立博物館は千葉県流山市の文化財や郷土資料の保存、展示を目的に1978年に設置されました。実習では主に博物館の教育普及講座への参加や、市内の宅地開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査から保存までの見学、実習などを行いました。

実習の1日目の午後は5月から7月にかけて流山市立博物館で実施された教育普及講座の参加レポートの発表でした。参加する講座は選ぶことができるため、私は「勾玉づくり」と「勾玉づくり・拓本で葉づくり」の2つの講座に参加しました。事前準備において「勾玉づくり」では作る事に意識が向いていたために、作り方は調べましたが当日、来館者に何故、勾玉が作られたのか説明することができませんでした。勾玉づくりを博物館で講座として行うことの意味を失念していたと反省しています。参加レポートの最後には各自がやってみようという教育普及講座の発表を求められました。私はその反

省から博物館にしかできないこと、例えば古代の勾玉づくりに使われた道具の展示を併せて行いたいと思いました。

実習には埋蔵文化財の発掘調査の予定も組まれていましたが、悪天候のため市内の発掘調査、遺跡の見学となりました。見学させていただいた発掘現場では、以前の調査から埋蔵文化財があることが確認されていた、畑の開発に伴う発掘調査が行われています。見学では畑の中の土器や竪穴式住居の跡が出土しているトレンチと発掘された1600年代に使われていた道を見ることができました。トレンチとは発掘の事前調査として遺物、遺構の有無や遺跡のおおよその年代を確認するために地表から50cmほど下の関東ローム層まで掘り下げた横幅1mほどの穴です。そして遺跡が千葉県が発掘調査の対象となっている戦国時代までの遺跡と判断されたら発掘調査へと移ります。トレンチの中には埋められて形を保ったまま掘り出された土器がありました。また黒い円は住居の柱の跡、黒い土は火を使った跡だと教えて頂きました。道の隣にも縄文時代の遺構があり、狩猟に使われた落とし穴がありました。発掘が終わった場所は小学校と中学校の建設工事が始められていました。

次の遺跡の見学では東深井地区公園(古墳公園)に行きました。古墳公園では森の中の散策路と古墳を囲む柵以外は整備がされていないため、古墳群が形を変えずに保存されています。見学者向けに古墳があることを示すパネルや案内のパネルが設置されていましたが、古墳が木や下草に囲まれて散策路から見えにくいこと、また森の中にあるため足を運びにくいと感じました。また移動中の車内からは調査が終わって埋め戻された貝塚や、畑の中に露出している貝塚も見ることができました。遺跡の見学では保存と活用だけではなく、遺跡のある土地の活用についても見る事ができました。畑が地面を削るために地中の埋もれていた遺物が露出していくことや、地域の生活のために遺跡を壊すことは、人が同じ地域に住み続けているためやむをえないことだと思います。だからこそ地域の記録を残していく地域の博物館はなくてはならないと思いました。



写真11 トレンチで見つけた土器



写真12 土器の注記作業

28日は文化財整理室での昨年発掘された土器の注記と洗浄の実習を行いました。注記では筆を使い遺跡の場所、その中の何処から出土したのかを表す番号を土器の内側に書きます。文字は新聞の文字と同じくらいのため滲んで文字がつぶれたり、縄文の凹凸に筆先が引っかかって文字が途切れるなど作業が進みませんでした。洗浄ではブラシを使って土器から泥を落とします。丈夫な土器の中に触るとすぐに崩れる土器が混ざっていたために、崩れない土器を選ばなくてはなりませんでした。28日の午後は流山市の倉庫で市民の方が寄贈した、江戸時代に建てられた倉から運び出された民具整理の整理を行いました。ここでも博物館資料になる前の資料に触れる事ができました。長い間倉にしまい込まれていた民具は埃を被っているため埃を払い、寄贈者に返却する物と博物館に運ぶ物に分けました。また作

業の合間に資料から読み取れる情報を教えて頂きました。例えば長持などの箱の中からは赤い食器がたくさん出てきました。これは食器が多いのは持ち主が名主であったため、村での祝い事に使う物の管理をしていたからだと教えて頂きました。民具の使い方がわかって、何故それを所有していたのかを読み取ることが難しく、経験と知識が必要だと実感しました。

私は実習の一日目に小栗館長に「気づきを大切にしてほしい」と言って頂いた事をずっと意識していました。そしてすべての実習で自由に見て考える時間を取って頂いたおかげで毎日新しい発見がありました。流山市立博物館の職員の皆様、博物館実習を受け入れて頂きありがとうございました。

上田市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 三吉泰喜

私は7月23日から7月28日までの休館日を除いた5日間、長野県上田の上田市立博物館で実習させて頂きました。上田市立博物館は本館、別館、櫓の3つの見学ができ、地域の歴史、自然、人物、城等の展示をしている博物館です。実習では今回の実習では学芸員の仕事内容や体験として企画や整理などを行った。

企画は、実際に資料展示をすると仮定した場合のレイアウト作成、資料計測、キャプション、パネル作成を行った。この作成では、実習生個人が展示のレイアウト、パネル、キャプションの内容を作成し最終日に発表するものです。展示するものは「能面、狂言面」といって能、狂言の演目で使われていた面です。当館にはその面が70種類以上あり、面の形や表情も様々です。当館の面を実際に展示させる場合を想定し作成した。初めに展示ケースの計測から行った。縦、横、奥行き、間の柱の厚さなど計った。その後、展示する資料の数と内容、間隔などを考えたが、展示範囲が決まっている中でどのように展示するか、また誰に、何を、どのように伝えるかとも悩み、企画の大変さを知った。



写真13 出土品整理 瓦洗い

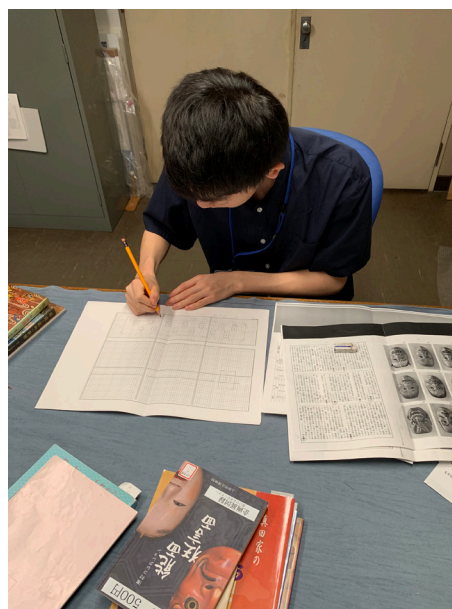


写真14 展示レイアウト作成の様子

実際に課題発表の際にもレイアウト、パネル、キャプション、展示する能面、狂言面の数や置き方、位置、考え方も違った。そのため発表後の意見交換では、自身では気が付かなかった工夫などの新たな考え、改善方法を見つけられた。発表では口頭での説明もあったが実際はそうとは限らない。一部の範囲での展示レイアウト作成であったが、自身が考えた構成、意図を展示資料と作成したパネル、キャプションで来館者に伝えることの大変さを実感した。

また、期間中に実習の一環として、市内の信濃国分寺資料館、丸子郷土博物館の見学をした。信濃国分寺資料館は上田市立博物館では扱っていない上田、小県地方の原始から古代の考古、古代史と全国の国分寺跡に関する資料の調査研究し収集がされ、丸子郷土博物館では、出土遺物と明治から昭和にかけての、近代機械製糸業の盛衰を紹介する展示があった。

信濃国分寺資料館では、出土品整理として実際の出土品の瓦の汚れを落とす作業を体験した。瓦の数は多く、また泥や埃を被っていたため水の入ったバケツに箒を入れブラシで丁寧に汚れを落とした。特に注意したこととして、模様が無くならないようブラシで大きく動かし、力を入れすぎず、長時間水につけないでゆっくり丁寧に泥を落とした。初めは大きさ、形が違うだけだと思っていたが、実際に泥を落としていくと色、模様は違った。そして、想像以上に多くの汚れがあったことが水を見て確認できた。

実習では、ほかにも清掃、窓口業務から資料の運び出し、借用立会など実際の現場の作業や来館者の方々に、自分自身が直接関わる事ができる貴重な体験をさせて頂きました。そして多忙な中、私達実習生のために時間を下さった博物館職員の方々、ありがとうございました。

八王子市郷土資料館

心理学部心理学科 4年 菊池風羽

2019年7月31日から2019年8月16日の9日間の間、八王子市郷土資料館で学芸員実習をさせて頂いた。八王子市郷土資料館は地上2階建て、1階は通史展示で八王子市の歴史を学べるものになっている。2階はテーマ展示となっていて小学校の授業で行う「昔の生活」に対応している展示となっていた。夏休みということもあり、「こども考古学教室」や「戦時下の子どもたち」という展示も行われていた。

今回の実習では、中央線開業130周年記念に合わせて昭和初期の八王子の鉄道展示、「まが玉作り体験」のサポート、古文書の清掃や写真撮影、民具の資料カード作成、調べ学習をしたものを来館者に解説、刀剣の扱いなど多岐にわたる実習をさせて頂いた。初日から講義だけでなく、実際に自分たちでパネルの内容を考えたり、資料に直接触れてどのような資料なのかという実習をさせて頂き、とても貴重な体験ができた。実習を行っていく中で、特に難しく感じた実習は中央線開業130周年記念に合わせた昭和初期の八王子の鉄道の展示だ。この実習は2人1組で行うもので、初日、2日目、5日目の3日間で実習を行った。初日は、甲武鉄道、中央線、高尾ケーブルカー、御陵線、武蔵中央電鉄の5つから各班担当を決めて、解説パネルの解説文を考える作業から始まった。私達の班は中央線の担当になり、昭和初期の八王子の中央線について解説文を各々400字にまとめてゆくことにした。指導員の方々から頂いた資料を元に解説文を考えるのだが、400字という決められた中で、どの情報を優先し解説文に入れてゆけば良いのか悪戦苦闘をした。その後、ペアになった実習生の方とお互いに書いた文章を読み、必要な部分と必要ではない部分を話し合っ初日を終えた。2日目は話し合いの続きを行い、清書に取り掛かった。事前に大学の博物館実習の授業や博物館

展示論の授業で、博物館展示について学んでいたが、授業では解説パネルの内容を考える授業を行っていなかった為、沢山の情報を400字以内にして、来館者に分かりやすいようにパネルを作る難しさを今回の実習で学ぶことができ、とても勉強になった。そして展示実習の最終日には、指導員の方にパソコンで清書していただいたものをリパネルに貼って切っていく作業と1階の展示室にパネルとそれに関連する資料を展示する作業を行った。どちらの作業も来館者の方が観た時にきちんと平衡感覚をとれたものにならないため、慎重に作業を行った。3日間通して行った展示の実習だけでも多くのことをこなさなくてはならないのだと感じたが、2日目の展示についての講義で今回私達が携わらせていただいた所はほんの一部でしかないと聞き、改めて学芸員の仕事の大変さを実感することができる実習だった。

また古文書の取り扱い、民具の取り扱い、刀剣の扱いの実習では、実際の資料に触れさせていただいたのでとても緊張をしたが貴重な体験であった。古文書の取り扱いでは、先祖が千人同心であった八王子市狭間町の方から寄贈していただいた古文書の整理を丸1日かけて取り掛かった。古文書が入っていた箱、袋ごとに番号を割り振ってゆき写真を撮影する。その後、古文書に付着している虫、虫のフン、砂、ホコリを払う作業を行った。古文書を整理している際に指導員の方が、古文書にどのような事が書かれているのか、文末の見分け方、現在で言う株券や不動産関連が多いということなどを教えて頂きながら行っていたため、古文書の魅力を知ることができた。民具の取り扱いでは、寄贈して頂いた資料を資料カードに写真、作図、その他気になる点のコメントを記入する作業を行った。私は筆箱の資料を選択し、写真撮影、作図を行ったが、特に作図は筆箱の凹凸の表現や細かいロゴを描くのに苦戦をした。その結果、人一倍時間がかかってしまったが資料カードが完成したときには大きな達成感を感じることができた。刀剣の扱いでは、最初に講義を聞き、その後本物の刀剣を鞘から刀を抜き、手入れする状態に分解するという実習を行った。今までの実習の中で一番緊張した実習であった。その理由には本物の刀ということもあり、周りにいる人を傷つけてしまう恐れや資料自体を傷つけてしまう恐れがあったので、慎重に取り掛かった。刀を鞘から抜き、柄や刀掛けを刃から外していくと、目釘孔や名前などの彫りを見つける事ができるのだと知った。また、刀の展示は難しく「貴重な刀を見せて欲しい」という声と「子供が来る場所に危ないものを置かないで欲しい」という声があると聞き、学芸員はそのような配慮もしなくてはならないのだと知り、来館者にとって何が良いのか考えなくてはならないのだと考えさせられた。



写真15 展示パネル作成



写真16 実習生10名で作成した昭和初期の八王子の鉄道展示

今回実習をさせて頂き、学芸員の仕事は様々な業務をこなさなくてはならない仕事であり、日々自ら学び、学んだことを人々に伝えてゆく仕事なのだと実感した。9日間沢山の实習体験をさせて頂き、学校の授業では学べない現場での学びができた。忙しい中実習を引き受けて頂き感謝の気持ちでいっぱいだ。

《郷土博物館での実習》

飯能市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 小野ゆりあ

私は2019年8月2日から8月9日までの休館日を除く7日間、飯能市立博物館にて実習をさせていただきました。飯能市立博物館は、飯能の歴史について「里」「町」「山」「飯能今昔」の4つに区分され、特徴的な歴史や文化を展示している歴史展示室、西川村についての歴史と現在を展示している飯能と西川村、飯能河原、展覧山・多峯主山周辺の自然を展示している身近な自然コーナーの3つの常設展示を行っている博物館です。

今回の実習では主に教育普及活動を行いました。毎年飯能市立博物館が行っている行事の1つである「夏休み子ども歴史教室」の準備、運営を行いました。夏休み子ども歴史教室の内容として、午前はずし字を使った魚釣りゲーム、午後は博物館内で宝物カード作りをするというものでした。魚釣りゲームは、スクリーンに海の生物の名前が映し出され、それをチームで解説し、早く釣り上げると高得点になるゲームと、生物それぞれにくずし字で書かれた数字が貼られており、スクリーンに映し出された生物の点数が高いものを釣り上げ得点を競うゲームの2種類を行いました。宝物カード作りでは、宝物カードを3枚渡し、1枚は全員が木造軍荼利明王立像を書き、あとの2枚は好きな展示物を見てカードを完成させるというものでした。準備では、魚釣りゲームに使用する魚やクラゲなど8種類の海の生物のイラストを実習生5名で分担しました。また、宝物カードの見本を作成しました。当日は、会場準備や子ども達の誘導など役割分担し、主に子どもたちの誘導を担当しました。15名の小学生に来ていただき、午前中は小学生に5つのグループに分かれてもらい、実習生が各グループにリーダーとして付きゲームの得点係をしました。私はあまり小学生と関わることがなく、どのようにコミュニケーションを取ろうか考えていましたが、魚釣りゲームの準備の時に話しかけると元気に答えてくれ、同じチームの子どもたちと楽しくゲームができました。イベントには友達同士で参加している子や兄弟で参加している子が多かったですが、一人で参加している子も数名いました。1人でいる子には積極的に話しかけ、コミュニケーションをとるように心掛けました。普段関わることの少ない子どもたちとイベントを通じて交流をしたことで、子どもから展示はどう見えているのかを知ることができました。イベントの内容は、ただ楽しむだけでなく、多くのことを学べるので子どもたちにとって良い機会であると思いました。実際に子どもたちにアンケートを取ると楽しかったと答えた子が大半でしたが、中には1日のイベントに疲れてしまった子もあり、全員が楽しかったと思えるイベントは難しい課題であると感じました。

歴史教室の準備が早く進み、急きょ企画展示していた「ヒロシマ・ナガサキ原爆パネル展」を見て実習生の感想をまとめる作業を行いました。私は広島、長崎へ行った事がなく、小さな写真や映像でしか見たことがありませんでした。今回の展示を見て、写真に迫力があり、原爆が投下された後の人々や町の様子を見て、言葉が出ませんでした。多くの方が亡くなってしまったことが大々的に報道されることが多いですが、生き残った人々の生活、原爆が原因で差別されていたことが書かれていて、このことを知ったときは心が痛くなりました。企画展を見た後、「平和の木」と書かれた掲示があり、展

示を見た方の感想や平和への願いが書かれていました。実際に博物館へ来館する方はご年配の方が多く私と同世代の方が来館される姿はほとんど見られませんでした。しかし、広島、長崎の原爆について、私たちは他人事ではいけないと思います。二度とあってはならないことだからこそ知っておくべきことだと思います。展示を見た後、実習生でそれぞれ意見を出し合い、展示を見た感想や印象に残ったパネル、原爆に対する意識をまとめ掲示物を作成し、平和の木の横に飾りました。ただ展示を見るだけでなく、それを見て何を感じたか、何を思ったかを考えることが博物館展示において大切なことだと感じました。

実習を通して、博物館にいるからこそできた経験、学びが多くありました。教育普及をはじめ、民具整理や古文書整理など、学芸員の仕事の幅広さを実感しました。実際はさらに多くの業務があると思いますが、お仕事を体験できたこと、博物館で体験できたことは貴重な経験です。学芸員には知識と責任感が必要だと感じました。

最後になりますが、尾崎館長はじめ飯能市立博物館の職員の皆様、7日間実習生として受け入れていただき本当にありがとうございました。



写真17 夏休み子ども歴史教室の様子

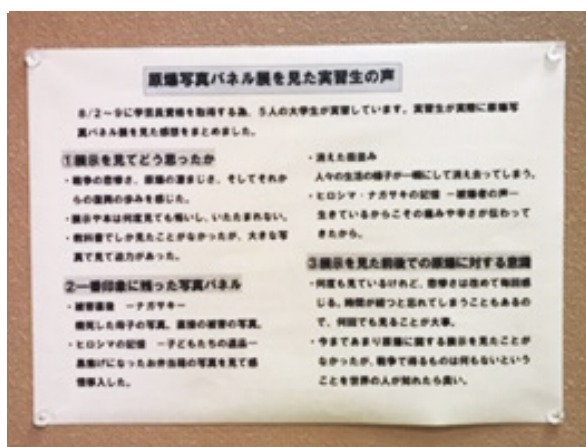


写真18 原爆写真パネル展を見た実習生の声の掲示

飯能市立博物館

科目等履修生 馬場章太

2019年8月2日より2019年8月9日までの休館日を除く7日間、私は飯能市立博物館(愛称:きつとす)で博物館実習をさせていただきました。

飯能市立博物館は平成2年より開館していた飯能市郷土館が常設展示改装工事するとともに名称変更が行われ、平成30年4月1日にリニューアルオープンし現在の館へとなりました。愛称を「きつとす」とし、新たな常設展示、新たなロゴマークを設け、ビジターセンター的機能を兼ね備えた館になったとのこと。

全体的な感想としては、やはり教科書や授業で教えていただいた知識に勝る数多くの経験をたった7日間の中でさせていただいた、これに尽きると思います。特に展示に関しても企画運営に関しても、ただ施設を利用している側からではなかなか考えにくいような努力や作業の積み重ねが扉の裏側や地下で行われることによって施設が運営され、そしてお客様へいかに還元していくかという運営の根本や考え方を間近に見せていただいたことは深く印象に残っています。

さて、実習では施設見学を始めとし夏休み子ども歴史教室の運営や飯能市立博物館が管理する名栗くらしの展示室見学、民具・古文書の整理を行いました。夏休み子ども歴史教室の運営では対象を小学3年生から小学6年生として「古文書に挑戦!〜くずし字を読んで・遊んで・書いてみよう〜」と題したくずし字について学んでもらう講座を行う為の準備(写真17)から当日の運営、反省会という博物館教育の一端を体験させていただきました。主な当日の流れとしては、導入を行ってから磁石を使ったくずし字魚釣りゲームを2回対戦、その後くずし字と常設展示を組み合わせた鑑賞を行うというものでした。子どもを印象とした企画というと、何が起るかわからない、準備しても足りないというものだと思います。今回も例に漏れず想定している以上の能力を魅せてくれる子どもたちに対し、慌てず的確にその場でプラン変更をしつつ(写真20)運営する担当学芸員さんには驚かされました。最後には子どもたちに笑顔で帰ってもらい、翌日には集計したアンケート結果から考える反省会を行いつつ当日のスタッフの配置や子どもそれぞれの様子、また広報についても協議させていただきました。

民具や古文書の整理では実際に民具や古文書を資料にするための整理の一部をやらせていただきました。民具では個々の状態に関して所定の用紙に記入していく作業を行います。民具の高さ、幅、奥行きを正確に測定し、虫食いやシミなどの保存状態に関してまとめつつ、名前などの文字が書き込まれていないかを細かくチェックし解読しました。どれも年代物のため壊れやすいですが、どこを持って大丈夫かなど細心の注意を払いつつ、運搬や観察、解読をしなければなりません。自分の手の中に貴重な品を持って扱うという学芸員の日常を、実際の所蔵品で体験させていただけるとは思ってもいませんでした。古文書では表紙と裏表紙の内容を解読しつつカードへ記入していきました。幅広い年代のくずし字はほとんどが同じ人が記したものとはいえ、癖によってとても現代では読みにくい文字列になっています。一点一点を確認しつつ必要であればくずし字辞典を用いて読み解いていくのはかなり脳が疲れる作業です。更にはこの段階で繊細なページ一枚一枚をめくりつつ内容を確認するこの作業を、専門分野の方がやるとはいえ数人でしか分担できないとなるとどれほど大変な作業であるかがうかがえます。ただこうした作業によって資料として扱えるようになると思うと、展示としてや研究資料として扱われるまでの準備がどれほど重要で労力のかかるものかというのが直に伝わってきました。



写真19 夏休み子ども歴史教室準備 試作



写真20 夏休み子ども歴史教室当日 プラン変更跡

飯能市立博物館は私が幼く郷土館であった時代から訪れさせていただいている身近な博物館です。今回の博物館実習を受けたことによって、お客様側だけでなく、実際に働く側としてという2つの視点から博物館の運営というものについて考える機会をいただきました。今回の実習をもとに、更に学芸員課程への理解を深め勉強したいと思います。飯能市立博物館の皆様には心からの感謝を申し上げます。

清瀬市郷土博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 川原 拓馬

清瀬市郷土博物館では展示テーマを博物館側から提出されグループでテーマについて考え、最終日にコーナー展示をして発表するという流れで始まった。テーマは「柳瀬川について」である。私たち実習生は歴史を調べるところから始め、展示テーマの柳瀬川を「清流・汚染・再生」として川の歴史についてまとめていった。

「柳瀬川の歴史」

柳瀬川は当時昭和初期から昭和40年ごろまでは清流であり、川にはたくさんの魚が住んでいたため釣りをする人が多くみられた。釣りをする人などの写真が「清瀬市史」には載っていた。しかしきれいな川も昭和45年から昭和62年にかけては汚染された川となっていつてしまっており、柳瀬川の「底生生物から見る水質調査」を資料で調べたところ昭和59年から昭和62年が一番汚い時期であったと知った。汚いにも度合いがあり、昭和59年から昭和62年にかけての川は「極めて汚い川」と水質調査によって確認されていた。その汚くなった原因というのが、団地が出来たことによる人口増加である。昭和42年と昭和47年に田んぼであった場所に団地が建設され新住民が増えたことである。団地ができた場所は川のちかくであったため生活排水が川に流れ汚染され、さらに柳瀬川につながっている空堀側からは工場から出た汚水が流れ、柳瀬川へと運ばれていった。昭和56年に水再生センターが建設されるも数年で川の状況を改善できず「ドブ川」であった。そのため川にいた魚たちはいなくなってしまい誰も近寄らなくなった。当時の柳瀬川について知っている人に聞いたところ窓を開けると異臭がしたため窓を開けられなかったと供述している人や川に犬の死体が流れていたなどの話をいただくことができただけでどのような状況であったのかが想像できた。今の柳瀬川は一級河川に指定されるほどきれいになってきたがその背景には水再生センターの活動だけでなく清瀬の自然を取り戻すためボランティアの方々が川をきれいにすべく頑張っていたということが分かった。さらに豪雨によって柳瀬川が氾濫を起こしたことが清流であった頃の記録であることから柳瀬川の奥に金山調節池が設置され護岸工事も行われるなどの歴史もあり今一級河川の柳瀬川ができていくことを実感することが出来た。今では多くの生物が川に住むようになりカワセミやアユといった生物がすむようになるなど清流であった当時に戻りつつあるようである。

「展示するにあたっての考え」

私たちはその展示を博物館へ訪れる方たちへ伝えるための展示を考えた。博物館に訪れる方々の多くは年配の方が多いが若い世代も訪れているため汚い頃を知っている方々には当時のことを再確認してもらい、川が汚かったころの柳瀬川を知らない人たちに対して当時の川がどれだけ汚かったのかを知ってもらい当時のように川を汚くさせないメッセージを込めて展示を考えた。展示するパネルを作るためパネルづくりや資料を読み解いていくことが大変であった。

主に多かったことは展示準備である。展示をするストーリーが決まったところでまずどのようなパネルを用いれば当時の汚染された環境が伝わるかという写真を探すことやキャプションづくりをしていき、設置したときどのようにすれば見やすいのかを考えていった。

「柳瀬川のコーナー展示で行ったことについて」

メインターゲットは一般成人であり、使用資料には川の写真やそこに住んでいた魚のイラストを作成しどんな魚が生息していたのか一目でわかるようにして、どんな道具を使って魚を取っていたのかわかるように「魚籠」を博物館から拝借して展示した。汚染されていた柳瀬川がどれだけ汚かかったかわかるように当時の汚染されていた川の写真に加えて、どれほどの川の汚さなのかわかるように「底生生物から見る水質調査」を清瀬の公害という資料から探し出し表にして展示した。清流であった頃の柳瀬川から汚染された川に変わっていなくなってしまう魚をイラストとして展示し柳瀬川から姿を消した生き物がいたということを確認してもらった。また柳瀬川の事を知らない見学者もいる可能性のあることから柳瀬川の間所がわかる地図を張り付ける工夫をした。年表を作成し一般の歴史と柳瀬川の歴史を対比させ、それによって当時の歴史を振り返りながら、柳瀬川で起きた公害についても学ぶことが出来るようにした。

「写真に対するコメント」

パネルを作成しているところ A2 のパネルを作成したため切るところが長く、横は定規の長さが足りないためきることに苦戦した。パネル、キャプション制作は今回展示ケースを三つ使ったためかなりの量を制作した。パネルやキャプションを制作して気が付いたことは紙によってカッターで切りにくいものがあり、一枚一枚を丁寧に慎重に制作をしていった。多くのパネルやキャプションを作ることの大変さ、テーマは決まっていたが自分たちで考え一から制作していくことがどれだけ時間がかかっていたのかがやってみてよくわかった良い経験となったと感じた 10 日であった。柳瀬川の展示はキャプションの配置場所や配置高さ、幅などを考えていくことに苦労をした。そして特に大変であったのがパネルを張り付けると



写真21 パネルの作成中



写真22 柳瀬川の展示

きである。展示ケースの中で釘打ちをするため天井が低く大変で、かなり時間をかけて制作した。階段のように展示物に高さをつけ見学者に見やすいように工夫をした。どうやって見せていくべきなのかがどう展示すれば見やすくなるのか考えることは大変であったが実に勉強になった。

《自然史博物館での実習》

埼玉県立自然の博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 小川志穂里

私は、2019年8月1日から8月9日までの間埼玉県立自然の博物館にて博物館実習をさせていただきました。埼玉県立自然の博物館の歴史は古く、大正10年に秩父鉄道株式会社が設立した「鑛物植物標本陳列所」に遡ります。現在も多くの人々に県全域の自然分野の標本や情報を集約・発信し続け、埼玉県立博物館の中で唯一の自然史博物館として愛され続けています。

実習期間は休日の2日間を除き7日間と短期間で行われましたが1日の実習内容が実践的なものが多く、学芸員としてとても濃い経験ができたと感じています。1日目の最初の実践はIPMの実践でした。館内に仕掛けられた罠を回収・開封し、標本に害を及ぼす虫がないかを一匹ずつ確認しカウントしていく作業を行いました。玄関付近の罠からはカツオブシムシやチャタテムシ、職員の方も稀に見るシバシムシアリガタバチなどを実際に確認でき、初日から収蔵品管理における問題の一つを体感させていただけたことにも感謝しています。また、カツオブシムシは動物性の乾燥物を食害するため、蛇など骨を崩さず肉片を取り除くことが難しい標本は先にカツオブシムシに食べてもらい後から骨を回収するという方法もあるとお聞きし、ただ害を及ぼす虫だけでなく博物館にとっても役立つ虫もいるということに驚きました。



写真23 鉱物図鑑作りの鉱石解説中



写真24 冷凍された動物死体の移動作業

自然史講座の実践では、未就学児から小学生までを対象とした鉱物図鑑作りのイベントに鉱物の解説員として参加させていただきました。大人でも難しい知識をどのように分かりやすく子どもに伝えるかを試行錯誤しながら解説を行いました。質問に対し「分かりません」という返答は通用しないので、子どもはもちろん親御さんから、どんな質問をされても答えられるよう知識を身につけました。答え終わった後に子どもたちがより鉱物に興味を持ち、納得した親御さんから「ありがとう」という言葉をいただき、普段、学芸員しか感じることでできない喜びを、業務を通して同じ目線で体感することができとても嬉しかったです。

博物館にとって大事な教育普及の一つでもある博物館クイズの立案と来館者のモニタリングを、未就学児を連れた家族を対象として行わせていただきました。モニタリング調査で来館者から聞き出した感想や改善点などをふまえ、展示の魅力をより伝えられるようなクイズを立案するのが難しかったです。私は、埼玉県立自然の博物館の悩みどころでもあるという企画展示コーナー限定にクイズを作成させていただきました。企画展示コーナーは2階の小さいスペースにあり、小さい子どもはすぐに飽きてしまい、1階の大きな展示に興味をひかれやすく家族連れの滞留時間が短いことが問題となっているようです。実習最終日に完成したクイズを実際に来館者に配布し、受付で感想を聞くといった業務も行いました。子供達たちからは「他の骨格標本と見比べてるのが面白かった」という感想や、親御さんからも「今までじっくり見たことがなかったけど見られてよかった」というお言葉をいただき、とてもやりがいを感じました。自身が考案したものが博物館にどのような影響があるのか目の当たりにし、来館者から生の声を聞くということの大切さを学ぶことができたと思います。

展示製作では箱に丸い穴が空いているという構造を活かし、中に数種類の木の実を入れ、穴から手を入れ取り出してもらうという展示を作りました。箱の蓋には食用として美味しい木の実はどれか比較してみようというテーマを貼り、箱の中には答えを貼っています。未就学児の子どもでも瞬時に興味を引くようなテーマをコンセプトにし製作させていただきました。植物担当の学芸員の方には「今までにない新しい発想の展示だ」というお言葉をいただき、とても光栄でした。

資料管理では地質・動物・植物の3つの資料管理を学ばせていただきました。まず始めに地質の分野ではワタ布団作りから始まりました。次にチチブホタテの化石と鹿の頭骨の梱包作業を行いました。チチブホタテはワタ布団を2枚使用し梱包しましたが、鹿の頭骨は2枚では収まらず、角と口の部分にもワタ布団を使用し4枚で梱包しました。実際に運ぶときを想定しどの角度からでも落ちないように包むのに苦戦しました。動物の資料管理では収蔵庫に入らせていただき、整理しきれない剥製の標本とラベルをカメラで撮影する作業を行いました。撮影が終わると次に冷凍庫から動物の死体を取り出し、タッパーに種類別で移動させる作業を行いました。冷凍されていましたが、初めて見る動物の死体や血の匂いが充満し作業中に少し手が止まってしまうことがありました。移動を完了させ終えたとき、普段見ることができる展示の裏側ではこのような大変な作業が行われていたのだととても驚き、感動しました。植物の資料管理では寄居にある川の博物館に行き、古い植物標本と新しい植物標本のカバーの入れ替えを行いました。植物は脆く少しの衝撃で標本が欠けてしまうので細心の注意を払いながら平行移動で入れ替えを行いました。

私は今回の実習を通して、普段学芸員の目に見えない業務を体験させていただき、身をもって業務の大変さ、業務を行う意味の大切さ、学芸員としての責任を痛感しました。この経験は全ての仕事において共通することだと思います。日々現場で働く学芸員の方々の誇りを感じました。貴重な経験をさせていただけた7日間でした。

《美術博物館での実習》

新潟市美術館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 大岩優希

私は、2019年8月20日から8月30日までの休館日である月曜日を抜いた10日間、新潟市美術館にて博物館実習をさせていただきました。新潟市美術館は新潟市にある美術館で、「政令市にふさわしい、市民に開かれた個性あふれる美術館」を運営方針にかかげ運営されています。また、一般向けの講座や学校団体向けの出張授業など様々なプログラムを行っており、教育普及にも力を入れている美術館です。

今回の実習では、企画展でのボランティアや収蔵庫の掃除、収蔵作品を使つての照明・展示など他にも様々な体験をさせていただきました。企画展でのボランティアでは、現在行われている企画展、「バウハウス展」内の体験コーナー「バウハウスちいさながっこう」でボランティアのお手伝いをさせていただきました。このコーナーは、ドイツの造形学校バウハウスで実際に行われていた造形教育を、3つのゲームにしわかりやすく体験してもらうというものでした。まず自分たちがそれぞれのゲームを体験させていただき、どのような感じかを知ったうえでボランティアの体験に移りました。ボランティア体験は2日間させていただいたのですが、1日目は人が全然来ず何もできずに終わってしまいました。しかし、2日目は日曜日の午後ということもあり多くの方に来ていただけ、とてもやりがいがありました。中でも、「マッチ4本1分勝負！」という1分以内に4本のマッチでどれだけ多くの形を考えられるかというゲームがボランティア体験の中でとても印象に残っています。私たち実習生が体験させていただいたときは、みな考えすぎてしまい形を5個しか作ることができませんでしたが、遊びに来てくれた子供たちは次々と様々な形を作り時間内に10個ほど完成させていて、子供たちの発想力の豊かさに驚かされました。また子供たちだけでなく、最高記録の22個に挑戦した大学生グループやご夫婦で来られた方など多くの方が体験されて行き、老若男女問わず好評でした。

収蔵庫の掃除では、サイズの大きな額装作品が多く置かれている第1収蔵庫の掃除を行いました。扱いに注意が必要な作品が多く置かれている収蔵庫内では、特殊な掃除のやり方があるのかなと思っていましたが、説明を聞いてみると掃除機や雑巾を使うなど普通の家の掃除と変わらず意外でした。午後には、掃除と同時進行で敗れた綿座布団を直す作業も行いました。ここでは、事前に大学の授業で学んだことが活かされたのでうれしかったです。

また今回の実習では実習生が3人しかいなかったため、広い収蔵庫内を掃除するのは大変でしたが、掃除が終わって見渡してみると掃除を始める前よりも明るくなったように感じたのでとても達成感がありました。一番最後に行われた実習は、収蔵作品を使つての照明・展示体験でした。美術館の中にある市民ギャラリーを使い、草間彌生さんの額装作品と立体作品を自分たちで考えて展示するという貴重な体験をさせていただきました。額装作品を展示するときに、吊り下げのためのワイヤー、作品を照らすための照明を脚立を使って天井に取り付けたのですが、脚立から両手を放して作業しなければいけないことが多くとても大変でした。またワイヤーで作品を吊り下げる作業は、作品を水平になるように調整するのが大変でした。目で見るときは斜めになっているように見えても、水平器で見るときちんと水平になっていることがあり不思議でした。

立体作品の展示では、行灯型ケースを使って展示の体験をさせていただきました。予定では他の展示ケースを使う予定でしたが、全て使われていて無かったため急遽コクヨの行灯型ケースを使わせていただけることになりとても良い経験になりました。はじめは作品をどんな風に展示したらよいのだろうと考えがまとまらず不安でしたが、試行錯誤しながら展示をする作業はとても楽しかったです。展示が全て終わった後には、美術館の職員の方がたくさん見に来てくださり感想等も聞けたので、みんなで1つのものを作り上げたという達成感を味わうことができました。

実習期間10日という短い期間ではありましたが、美術館で働いている学芸員が実際にどのような仕事をしているのかを学び、体感することができました。実際に自分で作品をどう展示するか考え、実行に移すというのは大変で難しい作業でした。ですが、終わった後に「良かったよ」などの声をかけてもらい、今まで大変だったことが気にならないうらいうれしいという気持ちでいっぱいになりました。今回の実習で得られた貴重な経験や、学んだ事、感じた事を今後も大切にしていきたいと思えます。

お仕事がお忙しい中、博物館実習を快く引き受けていただき、また丁寧なご指導をしていただき大変ありがとうございました。

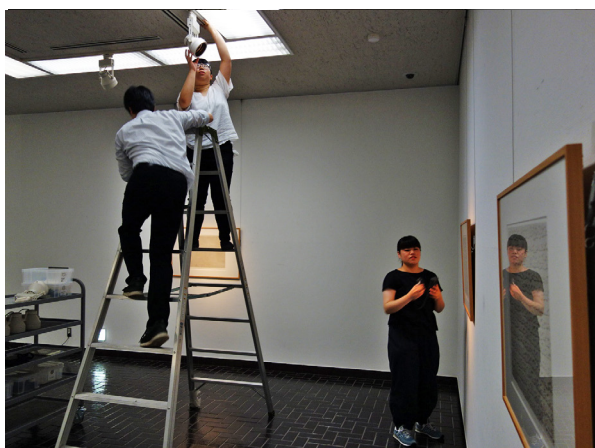


写真25 照明を取りつけている様子

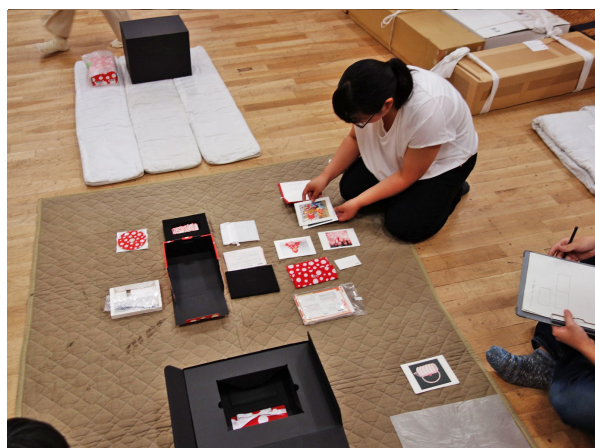


写真26 展示体験で使用する作品を確認している様子

Ⅲ. 司書教諭課程

駿河台大学 司書教諭課程について

メディア情報学部 助教 水沼 友宏

司書教諭課程の概要

学校図書館法第5条第1項には、「学校には、学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かなければならない」と規定されており、2003年度以降、12学級以上を有する小・中・高等学校に司書教諭を置くことが義務付けられた。駿河台大学では、2004年度に司書教諭課程を設置し、司書教諭資格を取得するために必要な資格申請を行えるようになっている。

司書教諭資格を取得するために

学校図書館法第5条第2項には、「前項の司書教諭は、主幹教諭（養護又は栄養の指導及び管理をつかさどる主幹教諭を除く。）、指導教諭又は教諭（以下この項において「主幹教諭等」という。）をもって充てる。この場合において、当該主幹教諭等は、司書教諭の講習を修了した者でなければならない」と規定されている。この規定に従い、本学では、司書教諭課程を修了して、資格を取得する要件として次の2条件を設けている。

(1) 教育職員免許状を有する者あるいは教育職員免許状取得見込みの2年次生以上の者

(2) 司書教諭の講習科目5科目10単位を取得していること。

(1) および(2)の条件を充たすため、教職資格の取得を目指す大学在學生は2年次以降に、もしくは既に大学や短大を卒業して教職資格を所持する者は科目等履修生などとして、司書教諭課程において資格取得に必要な科目を履修し、その単位を取得できる。

司書教諭を取得するための講習科目および単位数

本学は、文部科学省の委嘱を受けて、2004年度に学校図書館法で定める司書教諭の講習科目に相当する授業科目を開講した。本学で開講している司書教諭課程の授業科目は学校図書館司書教諭講習規定に定める科目と全く同じ名称のもので、以下の5科目10単位である。

	本学における司書教諭課程科目	単 位	配当年次
必修科目	学校経営と学校図書館	2	2・3・4
	学校図書館メディアの構成	2	3・4
	学校指導と学校図書館	2	2・3・4
	読書と豊かな人間性	2	2・3・4
	情報メディアの活用	2	3・4

司書教諭資格の認定

司書教諭に関する科目を履修し、所定の単位数を修得した者は、文部科学省が委嘱した学校図書館司書教諭講習実施大学の講習修了者として登録される。文部科学省へ司書教諭の資格を申請し、文部科学省から「司書教諭講習修了証書」が交付されて、司書教諭資格所持者となる。

= 資料 =

博物館実習協力館および受入人数一覧(過去3年間)

【2017年度】

No.	所在	館種	2017年度実習協力館	実習人数
1	東京	歴史	古代オリエント博物館	2
2	東京	歴史	一般財団法人 家具の博物館	1
3	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1

【2018年度】

No.	所在	館種	2018年度実習協力館	実習人数
1	沖縄	歴史	石垣市立八重山博物館	2
2	埼玉	理工	さいたま市青少年宇宙科学館	1
3	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
4	埼玉	総合	入間市博物館ALIT	2
5	東京	美術	東京富士美術館	1
6	東京	歴史	古代オリエント博物館	1

【2019年度】

No.	所在	館種	2019年度実習協力館	実習人数
1	沖縄	歴史	石垣市立八重山博物館	1
2	埼玉	総合	入間市博物館ALIT	1
3	埼玉	自然史	埼玉県立自然の博物館	1
4	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
5	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1
6	東京	歴史	八王子市郷土資料館	1
7	東京	郷土	清瀬市郷土博物館	1
8	千葉	歴史	流山市立博物館	1
9	長野	歴史	上田市立博物館	1
10	新潟	美術	新潟市美術館	1
11	北海道	総合	北海道博物館	1

2019年度資格課程・司書教諭課程修了者

〔司書課程〕

経済経営学部 経済経営学科

東岡 勇樹

メディア情報学部 メディア情報学科

石井 瑞穂
大岩 優希
小野 ゆりあ
加増利 泰宝
金村 玲花
久保田 麻友
塩田 小百合
太間 菜月
名取 鈴
藤田 悠太郎

心理学部 心理学科

荒岡 優馬
井坪 悠紀
井上 詩央里
中島 明日香
船田 真央

計16名

〔司書教諭課程〕

法学部 法律学科

吉田 稜

メディア情報学部 メディア情報学科

西川 彩香

計2名

〔学芸員課程〕

メディア情報学部 メディア情報学科

石井 瑞穂
浦崎 未来
大岩 優希
小川 志穂里
小野 ゆりあ
川原 拓馬
高橋 真由
藤田 悠太郎
三吉 泰喜

現代文化学部 現代文化学科

五十嵐 早紀

心理学部 心理学科

菊池 風羽

計11名

司書課程科目担当教員一覧（2019年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
石川 賀一	情報組織化論（情報資源組織論）／情報組織演習Ⅰ（情報資源組織演習Ⅰ）／ 情報組織演習Ⅱ（情報資源組織演習Ⅱ）
岩熊 史朗	コミュニケーション論
寺嶋 秀美	情報処理概論
野村 正弘	デジタル・アーカイブズ論
水沼 友宏	図書館情報学／図書館・情報センター経営論（図書館制度・経営論）／ 図書館情報システム演習／図書館サービス論（図書館サービス概論）／ 図書館総合演習

《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
河野 剛彦	歴史資料論
狐塚 賢一郎	生涯学習論
小南 理恵	情報サービス論
篠塚 富士男	図書館情報技術論／情報サービス演習Ⅰ（基礎）／ 情報サービス演習Ⅱ（発展）／情報資料論（図書館情報資源概論）
中村 順子	児童サービス論

司書教諭課程科目担当教員一覧（2019年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
杜 正文	情報メディアの活用

学芸員課程科目担当教員一覧（2019年度）

《専任》

[教員名]	[担当科目]
伊藤 雅道	環境生物学Ⅱ／生命の科学Ⅱ
井上 智史	マルチメディア論
井上 久士	歴史学Ⅰ／歴史学Ⅱ
今村 庸一	メディア社会学
海老澤 豊	歴史学Ⅱ
大久保 博樹	音響メディア論
大森 一宏	経済史Ⅰ／経済史Ⅱ
岡田 安芸子	日本文化論Ⅰ／日本文化論Ⅱ
木塚 隆志	西洋文化史
黒田 基樹	歴史学Ⅰ
狐塚 賢一郎	生涯学習論
斎賀 和彦	映像メディア論
寺嶋 秀美	ネットワーク構築論
杜 正文	データベース設計論
信岡 奈生	文化人類学Ⅰ／文化人類学Ⅱ
野村 正弘	博物館資料保存論／博物館実習（博物館実習Ⅰ・Ⅱ）／ デジタル・アーカイブズ論／地球科学
増田 珠子	歴史学Ⅰ
村越 一哲	アーカイブズ学
本池 巧	現代自然科学Ⅰ／現代自然科学Ⅱ

《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
枝川 明敬	博物館経営論
尾崎 泰弘	博物館資料論
河野 剛彦	歴史資料論
小作 明則	生命の科学Ⅰ
杉山 正司	博物館概論／博物館情報学（博物館情報・メディア論）
野木 道記	博物館展示論／都市と文化施設
橋本 みのり	環境生物学Ⅰ
羽田 武朗	博物館教育論
吉見 崇	歴史学Ⅰ／歴史学Ⅱ

駿河台大学 資格課程 年報 第20号

発行日 2020年4月30日

発 行 駿河台大学 資格課程

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須698番地

TEL 0429-72-1110

